

北海道新聞

平岸の歴史を訪ねて

〈開拓編〉

第23回・麻畑村

麻畑

『麻畑とよばれたむかし、ふぶきにも風にもまけず野をおこし

おかをひらいたあちから強いこころみんな元気な平岸小学校』

これは、平岸小学校校歌の2番の歌詞です。ここに書いてあるように平岸は、開拓当初「麻畑」という名前で呼ばれていました。明治5年に平岸村が開村したとき、その範囲は現在の平岸から定山溪までを含む広大な地域でした。今の平岸は、大字(おおあぎ)平岸村の字(あぎ)麻畑となっていました。麻畑の地名は、水沢からの開拓民が麻を植えていた風景からつけられたものです。

水沢と麻

水沢の歴史において、水沢漁網がいかに重要な地位を占めていたかは、水沢市史の第3巻の冒頭から丸々50ページ以上もその記述に割かれていることでもわかります。水沢は江戸時代に留守氏が支配していた地域ですが、留守氏はもともと仙台市宮城野区一帯を領地としていました。このあたりは、名取川の流域に広がる仙台平野の北側に位置し、東北地方では最も早く開け、古くから交易市場が栄えていました。目前には仙台湾が広がり、古代より漁業が発展していました。そのような中で、宮城野地域は麻を栽培し、麻でつくった漁網を特産品としていました。その象徴的な例が、宮城野区岩切に祀られる青麻神社です。名前の通り麻を祀る神社で、神紋も麻の葉をかたどったものとなっています(図1)。その創建は852年と古くにさかのぼります。鎌倉時代、源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼした後に、この岩切に本拠を構えたのが留守氏です。留守氏はこの特産品に目をつけ、保護します。江戸時代に入り、留守氏が水沢に転封されると、ときの藩主宗利は岩切時代に培った麻の栽培と製網を奨励し、水沢に根付かせることに成功します。宗利は、越後や伊勢から製網技術を持った職人を招聘し、高い品質を持った水沢漁網の開発に成功します。

留守氏は、漁網を開発しただけでなく、さらなる販路拡大を目指して、網元に水沢漁網を無償で貸し出し、今でいうモニターになってもらうことで、商品の普及を図りました。水沢漁網は軽くて取り扱いやすいうえに、丈夫で漁獲高が多いと高い評価を受け、販路の拡大に成功します。こうして、房総半島から三陸地方にかけての太平洋沿岸の漁網はすべて水沢産のものとなり、江戸時代の後期には、根室や択捉島など北海道でも水沢漁網が使われるようになりました。近代に入り、漁網が合成繊維で作られるようになると水沢漁網は姿を消しましたが、長年培った繊維製品の加工技術は今なお受け継がれており、デサント水沢工場で作られた「水沢ダウン」は、バンクーバーオリンピックの日本代表選手団の公式ウェアに採用されています(図2)。



図2. バンクーバーオリンピック日本代表選手団公式ウェア「水沢ダウン」



図1. 青麻神社の神紋

平岸と麻

水沢から北海道への移住を決めた時、計画段階で既に麻を栽培することが決まっていました。開拓使に移住を願った書類には、「男子ハ拓地ニ従事シ、麻芋ヲ培養シ、以テ従来営ム所ノ製網ノ業ヲ婦女子ニ為サシム」ことが記されています。また、以前書いたように、西21番(平岸2条11丁目付近)に入植した松井新四朗さんの記録によれば、入植当時精進川で鮭を発見し、国から持ってきた麻糸を出し合って大きな網を作り、鮭を大量に取ったことが記されています。これらのことから、水沢からの入植者が高い製網技術を持っていたことがわかります。開拓使側も、麻の栽培には大きく期待しており、明治8年には平岸産の麻から漁網を作るための教師を水沢から招き寄せました。この指導の結果、高品質の漁網を作ることに成功し、平岸を潤しました。麻から作られる網やロープは、開拓初期の北海道の工業や漁業の発展に大きく貢献しました。冬場の農閑期には、副業として製網に取り組み、この技術は平岸のみならず、周辺の農村にも広まりました。明治初期には、わが国における良質の大麻の産地として知られるようになりましたが、開拓から100年余りたったところから地力が低下し、徐々に収穫が落ちていきました。その後、麻から転換しリンゴを植えたところ出来がよく、「平岸リンゴ」として日本を代表する産地となりました。

麻畑の痕跡

「麻畑」という地名は現在でも意外なところで見つけることができます。南平岸駅前のマックスバリューの1帯(平岸3条10丁目〜13丁目)にある電柱柱に「麻畑北幹」というプレートが貼られています(図3)。これは電柱番号と呼ばれ、NTTの電話線の分岐単位ごとに、住所や地名などから名前がつけられています。この辺りでは、「平岸〇〇幹」や「美園〇〇幹」などがありますが、おそらく平岸幹ができた後に、新たな分岐を作ることになり、平岸と区別する地名ということで昔の字名をつけたものと思われます。

参考資料

水沢市史第3巻、水沢市史刊行会

郷土誌ひらぎし、平岸小学校開校80周年記念祝賀協

平岸百拾年、『平岸百拾年』編集委員会

新札幌市史第2巻、札幌市教育委員会

バックナンバーお届けいたします。ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

【編集後記】 水沢の特殊性

江戸時代の封建体制は基本にお米(年貢)によって成り立っていました。それゆえに、どの藩も経済対策には無関心で、せいぜい新田開発を行う程度でした。わずかな例外として薩摩・長州・肥前といった西国の雄藩が近代化に取り組んで成功し、ついには幕府を倒す原動力となったというのが明治維新の一面ですが、水沢もその偉大な例外のひとつといえるでしょう。水沢の場合、仙台藩の支藩であり、石高はわずか1万5千石に過ぎないにもかかわらず、独自に産業を育成・保護してきたことは高く評価すべきでしょう。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年生まれ。金沢大学理学部地球

学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭

に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

TEL: 0120-128-3480

FOX: 0120-128-3588

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みしています

76.5MHz FM Radio Station **APPLE**
FMアップル(76.5MHz)にて
「平岸の歴史を訪ねて」放送中!
今月は5月21日11時から



図3. マックスバリュー裏の電柱番号